

厨川白村『近代の恋愛観』への考察

—大正期恋愛ブームの意義を問う—

ホンセア（洪 世峨）

はじめに

今日、当たり前のように使われている、「恋愛」という言葉は、実は、明治維新後、新しい時代の必要に応じて誕生した一つの思潮であった。

明治期に普及したとみられる恋愛という言葉が、日本語の辞書に現れるのは、『仏和辞林』（仏学塾、1887年版）がもっとも早いとされている。ここで初めて amour の語訳が「恋愛。鍾愛。好愛。愛。愛セラル、所ノ者」となって登場したのである¹⁾。

明治期に翻訳語として入ったこの「恋愛」という言葉もしくは観念が今のような意味で使われるようになったのは、大正期に入ってからである。デモクラシーの季節であった大正期、西洋の文明として入ってきた「恋愛」も、自由主義という時代の熱風の中でその存在感を増していくことになる。

これについて、菅野聡美は、大正期は「恋愛が文学の素材としてではなく考察・分析の対象として認識され、実際にそれがなされた」としたうえで、「明治期においては、男女交際や夫婦関係、結婚のあり方は議論されたが、恋愛そのものはほとんど言及されなかった。それが大正になって、大の男が真正面から論じるに値するテーマとして扱われるようになったのである」と、明治期との相違に着目した。その背景として、「知識人の関心が明治期の天下国家から、大正期に入って個人や自我といったパーソナルなものに向けられたという思潮の変化がある」と指摘し、このことを「大正なくして恋愛は語れない」理由の一つとしてあげている²⁾。

西洋文明化の風に煽られ新しい国造りという巨視的な国家目標に多忙であった明治時代が過ぎ去り、個人の内面の発見や市民文化などが開花した大正デモクラシー時代の到来は、従来の家制度の崩壊とともに新しい男女関係をめぐる恋愛論ブームをも巻き起こすことになる³⁾。

その大正期の恋愛ブームの先駆けとなり、主軸となったのが、厨川白村（くりやがわ・はくそん、1880～1923）⁴⁾の『近代の恋愛観』である。

『近代の恋愛観』（大正11年10月、改造社）は、最初、大正10年の秋（9月から10月にかけて）、東西両都の新聞紙上に「近代の恋愛観」と題して連載されていた。その後、翌年に、「近代の恋愛観」及びその批判に応えるべく起草された「再び恋愛を説く」、「三度恋愛に就いて言ふ」の2編、さらにこれらの題目に関連して書かれた数編のエッセイを集め、単行本として出版され、その年のベストセラーになるなど、恋愛ブーム現象を呼び起こす契機となる⁵⁾。「霊肉合一」の「恋愛至上主義」を強く訴えたこの本は、白村自ら巻頭に、「世の批評に答ふべく」と言及したように、連載中から賛否両論の恋愛議論を巻き起こしながら、「新聞・雑誌に実に多くの「恋愛もの」企画が登場するなど、おびただしい数の恋愛書物を出版させる」という、大きな反響を呼び起こした⁶⁾。

しかし、これほど大正期恋愛ブームに大きな影響を与え、反響を呼び起こしたにも関わらず、『近代の恋愛観』に関連する現在の研究は、その具体的な内容分析はおろか、大正期恋愛ブームの中でいかに位置づけられ、検討されるべきかなど、ほとんど見当たらないのである⁷⁾。その理由としては、「恋愛論は短時日のうちに飽きられた」「一過性の流行品として消費されつくして終わった⁸⁾」という大正期恋愛ブームの時代の特徴が考えられる。

明治期、文明開化の一環として輸入された恋愛という概念が、大正期にいかにして誕生し、ブームを巻き起こしながら、消滅したのか。その時代的背景と意味合いを、恋愛と文明の中で研究することの一環として、白村の『近代の恋愛観』を考察していきたいと思う。

1. 近代的恋愛観の発見

先述したように、明治期に成立した恋愛という観念が、今日のような意味で使われるようになり、大衆レベルで根を下ろし、日本の文化に浸透していったのは大正期である。しかし、それに先立ち、今まで「色」や「好色」として卑

下されてきた男女間の「恋愛」の問題を時代の進歩にともなう「高尚なる感情」として扱い、恋愛時代の幕を開けた作品があった。それは、『女学雑誌』（明治25年2月号）で発表された、北村透谷の「厭世詩家と女性」である。

「恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抜き去りたらむには人生何の色味かあらむ」⁹⁾で始まるこの小文は、日本最初の近代的恋愛観の思想表明として、「いまだ「恋愛」なるものが市民権を得ていない時代に、「恋愛」こそ人生の至上価値と、真正面から「恋愛」を肯定した」¹⁰⁾恋愛賛美論であった。

社会主義運動家であり小説家である木下尚江（1869～1937）は、当時、「厭世詩家と女性」に対し、「この一句はまさに大砲をぶちこまれた様なものであった。この様に真剣に恋愛に打ち込んだ言葉は我国最初のものと思ふ」と評し、「それまでは恋愛一男女の間のことはなにか汚いものの様に思はれてゐた。それをこれほど明快に喝破し去ったものはなかった」と、この文が与えた衝撃を語っている¹¹⁾。

しかし、恋愛の発見により自己の存在を確認し、人生の秘密を解こうとした北村透谷は、「恋愛と結婚」という矛盾に陥ることになる。「厭世詩家と女性」を発表した当時、すでに結婚していた北村透谷は、「厭世詩家と女性」の後半部で次のように語っている。

婚姻によりて実世界に擒せられたるが為にわが理想の小天地は益狭窄なるが如きを覚えて、最初には理想の牙城として恋愛したる者が、後には忌はしき愛縛となりて我身を抑制するが如く感ずるなり。（中略）

嗚呼不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通弁となりて其嘲罵する所となり、其冷遇する所となり、終生涙を飲んで、寝ねての夢、覚めての夢に、郎を思ひ郎を恨んで、遂に其愁殺するところとなるぞうたてけれ、うたてけれ¹²⁾。

最初恋愛は、「人世の秘鑰」として賛美され、「想世界と実世界との争戦より想世界の敗将をして立籠らしむる牙城」として、高く評価されるが、「恋愛が

いったん日常化し、結婚にいたるや、それはただちに人間を実世界のとりこにしてしまうとの理由で、価値剥奪される。それゆえ男性としての「厭世詩家」からみれば、女性は恋愛の対象として一度は賛美されるものの、結婚して妻となるや否や「俗界の通弁」として侮蔑の対象でしかなくなるのであった¹³⁾ことになるだろう。このように、恋愛と結婚の断絶という矛盾の中で苦しんだ厭世詩家の「恋愛賛美」から「恋愛葬送」への綴りは、北村透谷自らの告白でもあった¹⁴⁾。

しかし、そのような矛盾にも関わらず、「厭世詩家と女性」は、新しい恋愛の発見として、今まで「汚いものの様に思はれてゐた」男女関係を、肉体と分離させ、精神的な恋愛を主張することで人間の内面と感情を強調する明治ロマン主義の一時期を画したことは間違いないであろう。

このように精神的恋愛を神聖なるものとし、一方、肉体的関係を否定した明治期の恋愛は、それにまつわる性欲、結婚、恋愛が切り離して考察されたことにその限界性がある。その残された課題、いわゆる恋愛というものが発見と解放から一步を踏み出し、恋愛に肉体と性欲を関連づけ結婚の問題まで真正面に扱うことになるのが大正期であり、その牽引役を果たしたのが厨川白村の『近代の恋愛観』であった。

東京帝大英文科を卒業し、英文学者として活躍した厨川白村は、近代ヨーロッパの文芸思潮を紹介する『近代文学十講』（1912・大正元）で広く知られることになり、しだいに文明批評の傾向を強め、かねてから関心を注いでいた恋愛詩や恋愛小説についての知見をもとに、20世紀への転換期からの「恋愛の自由」をめぐる新傾向をまとめた。それが『近代の恋愛観』という大ベストセラーとして誕生することになる¹⁵⁾。

それでは、『近代の恋愛観』がいかにしてベストセラーになったのか。その要因についてはまず、当時の日本出版界の発展と読者層の増加などがあげられる。李承信は、「特に、新しい読書層として現れた新中間層、女性読者層の拡大による出版市場の好況は文壇から多くのベストセラー作家を輩出することになるが、その中でも厨川白村は第一作である『近代文学十講』を通して、すでに人気作家としてその名を知らせていた。言いかえれば、白村は『近代の恋愛

観』の刊行により人気作家になったというより、当時出版市場で「恋愛論」の可能性を見せ、これを開拓し、恋愛ブームの先駆けとしての役割を果たした¹⁶⁾と指摘したうえで、当時の出版ジャーナリズムの隆盛は『近代の恋愛観』のベストセラー化の一つの要因に過ぎないと、そこにはベストセラー作家としての白村の戦略があったと分析している。それは、まず、新聞メディアという最も多くの読者を確保している媒体を選択した点、そして筆者の個性を表して表現するエッセイ形式の文体を使用した点、そして、アカデミーの世界に埋もれず、社会へ新たな一歩を生み出すという自身の立場の表明などが白村の周到な〈戦略〉だと分析、そのような白村の問題意識、態度は『近代の恋愛観』のベストセラー化に影響を与えたとみている¹⁷⁾。

ともかく、当時の出版ジャーナリズムの好景気にせよ、白村の戦略にせよ、彼が主張した恋愛論が多くの読者の心を奪い、愛読されたことに疑いはないだろう。

それでは、社会的反響を呼び起こしながら大正恋愛ブームの軸として位置づけられている『近代の恋愛観』が実際に語っている内容について、検討していきたいと思う。

2. 厨川白村と恋愛至上主義

“Love is best”¹⁸⁾で始まる『近代の恋愛観』は、「恋のみが至上である」という「恋愛至上主義」の讃歌としても有名である。

古代から近代まで、膨大な西洋文芸思潮を土台に繰り広げられる白村の恋愛論は、特に、スウェーデンの女性思想家エレン・ケイの「霊肉一致」、「恋愛の自由」思想を受け継いでいる。しかし、恋愛結婚を理想化し、一夫一婦制を支持しながらも、恋愛と結婚の永久性は認めなかったエレン・ケイに対し、白村は、「人間の燃ゆるが如き情熱と感激と憧憬と願望との白熱化した結晶とも見るべき恋愛には、悠久永遠の生命力がある」¹⁹⁾と、恋愛の「永遠不滅」を次のように語っている。

市場の有価証券、領土拡張騒ぎ、私有財産の争奪戦、博徒の縄張あらしひ

見たやうな国際競争、賄賂收受の法律裁判、脱税を目標での社会奉仕の財団、すべてそんなものが何になる、千年にして百年にして、否や僅か十年にして皆悉く廢墟ではないか。墳墓ではないか。世の利巧の愚者よ、俗漢よ。しごととか事業とか政権とか利益とかがそれほどまでに有り難いか。すべてが葬り去られて、草葉のかげに廢墟といふ墓標を残す悲しき日を思へ。『永久の都城』は羅馬ではなく、恋である²⁰⁾。

このように、すべてに勝る恋愛への賛美は、「恋愛至上主義」として、賛否両論を呼び起こした。特に、当時世間を騒がした百連事件²¹⁾と関連させ、その事態を煽った背後として反発を買うなど、非常な反響を呼んでいた。そのような世間の批判に答えられない訳にはいかなかった白村は、「再び恋愛を説く」に続く、「三たび恋愛に就いて言う」のなかで、その反発に答えていくような姿勢で、恋愛の意義を論じていく。

白村は「再び恋愛を説く」の緒言で、「私の悪文と訥辯とが、たとひ微力なりとも今日の世道人心を益し、文化發達のために、生活改造のために、何等かの貢献をなし得るの確信あるがためだ」²²⁾と述べ、「再び恋愛を説く」を書くにあたって、その「動機や感械を述ぶべく」自らについて語る自由を許して下さるように、読者に了解を求めた後、『近代の恋愛観』を書いた理由を次のように言っている。

昨年の秋、わたくしは東西両都の新聞紙上に『近代の恋愛観』と題した一篇のエッセイを連載した。それは一方に於て、性慾をのみ喋々する一代の悪風潮あるに激し、他方に於ては、恋愛を劣情なり遊戯なりと見る迷妄が、事実上今日なほ人心を去らざるに憤激して筆を執ったのであった。性慾をのみ説く者と、恋愛を劣情視する者との二つの極端は、一見全く背馳した思想の如くにみえるに拘はらず、それが両方とも恋愛の人生に於ける意義を正しく観て居ないと云ふ点に於て、時運の流れに棹さず生活の進展を阻害する事に於て、全く結果を一つにしてゐるからだ²³⁾。

要するに、「無闇に性慾をのみ喋々する者のみ多くして、その芸術的精神的意義を度外視し、更にまた一方には個人主義と唯物論と功利主義とが一代の人心を支配せるに慚らずして」いる「一世の傾向に反抗するために」『近代の恋愛観』を草したというのだ。白村は、「特に恋愛と個人主義との関係に就いて、及び因習的形式結婚の弊風に就いて、長たらしく書いて置いたのはそのためであった」²⁴⁾と述べ、「近代の恋愛観」で論じた恋愛と性欲の問題に触れる。

「近代の恋愛観」において白村は、「人生は欲求の無限の連続」であり、「生きるると云ふ事その事が既に何者かを求めることである」とし、このような生の欲求のなかでも「最も大きな最も自然な、そして最も強い欲求は新しい生命の創造である」と言う。そして、その生命の創造は「異性との結合によってのみ成される」ことで、そこに生じるのが恋愛である。したがって「恋愛なくして行はれる生殖作用は、野獣の喜劇にあらずんば、人間の悲劇である」と、恋愛とは性欲だけでもなければ、性欲を排除した精神だけのものでもないという主張から、近代は、「霊肉合一の一元的恋愛観の時代であらねばならぬ」とし、恋愛を精神的の愛と肉的爱との二つに分ける見方は「古くプラトオン以来の恋愛観の根本で、それが二十世紀に至って、はじめてかかる差別を徹した一元的の霊肉一致の恋愛観に到達したのであった」と宣言していた²⁵⁾。

このような、白村が主張する「一元的霊肉合一」の恋愛観は、エレン・ケイの思想に依拠していると同時に、その一方では、性科学が流行した当時の時代背景があったとされる。実際、「恋愛論ブームの時代は性科学ブームであり、羽太鋭治や澤田順次郎ら通俗性科学者が性科学の雑誌を刊行し、多数の著作を世に送り出した時代」²⁶⁾でもあった。

白村は、「近頃学者の性慾に対する研究は著しく進み」、「一般の思想界や学界に及ぼしたその影響は非常に大きいものであった。中でも精神分析学一派の学徒の研究の如き、一切の道德その他の精神現象の根本を性的渴望 (Libido) に在りと主張するに至ったのは、たしかに在来の幽霊道德の信者に向って、冷水三斗を浴びせるだけの痛快なものであった。人間の道德生活の根本である愛を、性慾に基づくと考へる事は、さまで難事ではない」²⁷⁾としたうえで、「男女間の事とし言へば、直ちに之を色情とか劣情とか痴情とか云ふ言葉で貶し去

らうとする古風な道学者」は「まだ畜生の域から一步も進んで居ない事を示してゐるに過ぎない」と非難した。そして、「人間が最初その動物時代に於て異性ととの結合を求めたのは、明らかに性慾満足と生殖欲望とのために相違なかった。しかし進化と共にやがてその欲望は浄化せられ純化せられ詩化せられて、そこに恋愛といふ至上至高の精神現象を生ずるに至つたのだ。ここに至つて既に最初の所謂『劣情』や欲望は、全然無意識心理の底に沈んで了ふ。恋は果敢ない浮草でもなく根無草でもない。飽くまでも深く強く性慾と云ふ泥田の中に根ざしてはゐるが、やがてそれが恋愛となつて高く美しく花咲き、母性愛や近親愛となつて実を結ぶとき、根柢は既に泥土のなかに姿を没してゐる事を思はねばならぬ。」²⁸⁾と、当時の性科学の成果や精神分析学の概念をもとに、まず性欲を肯定するところから社会進化論としての恋愛観を披露する。このように進化される恋愛は、やがて「結婚関係に入るに及んで、この愛は更に物的基礎の上に固められ強められ深められるのであり」²⁹⁾、それは、「結婚によって物的基礎が確立すると共に、愛の内容はここに再び進化し転移して複雑性を増し、更に一新境を開拓する。即ち最初の恋愛はやがて夫婦間の相互扶助の精神となり、至高至大の情誼と変じ、更に進んで親としての兒女に対する愛情に向つても変化していく。殊に婦人の有する最も貴き母性愛が、性慾に根ざせる性的恋愛の延長であり變形に外ならぬと見るのは、至当の見であらう」³⁰⁾この恋愛はやがて社会から民族をこえ人類全体に及ぶとき、人間の完全なる道德生活は成立することになるということだ。まさに、白村は、眞の恋愛を以て、階級闘争と国家間の戦争、そして男女両性間の差別をまで解決しようと訴えたのである。

それでは、「恋愛の墳墓」と呼ばれた結婚についてはどのような見解をみせるのだろうか。

3. 『近代の恋愛観』における恋愛と結婚

白村は、結婚と恋愛の関係について『成規の結婚なしにですらも、恋愛は道德的である。しかし恋愛なしには結婚は不道德である』というエレン・ケイの言葉を引用しながら、「わたくしは大胆なるこれらの断言を引用するほかに、

この点に就いては蛇足を添へたくないと思う」³¹⁾とし、恋愛なき結婚は不道德であると断言する。さらに、「外的条件を如何に完全に具備した結婚であっても、そこに両性間の恋愛を缺いてゐることは、最高の道徳から見て三文の価値なきものだ」と、恋愛なき結婚を断じて認めない。それは、白村にとって、結婚というのは、「双方ともに平等な人格と人格との結合」であるため、「もしそうでない場合には、その性的関係は主人と奴隸との如く、顧客と商品とのごとく或いは牝馬と種馬との如く、個人として既に一たび覚醒した近代人の目からは、それは甚だしく非人間的な非論理的な性的関係である」³²⁾からである。

これは、「恋愛なくして人間らしき生殖はなく、生殖なくして人間の存在は絶ゆ。私は言ふ。放蕩乱淫は性慾の遊戯化である。又恋愛以外の要素をのみ過重視したる性的結合（結婚）は、性慾の形式化に過ぎない。前者は言ふまでもなく畜生道であり、後者はしめ縄を張って和姦凌辱を敢へてする者の虚偽である。共に不可。性慾を浄化して眞に人間らしき性的結合となすものは、性慾の人格化であらねばならぬ。そこに貴き恋愛関係は成る」³³⁾という「性欲の人格化」につながる問題意識である。

一見、激しくもみえるこのような白村の結婚観は、男女平等・婦人解放という視点から『近代の恋愛観』を一貫する白村の理想でもあった。

まず、白村は、「特に経済上の独立を有しない人一殊に婦人が恋愛なき結婚関係によって自己の物質生活の安固を得るが如きは、何と考へても一種の奴隸的売淫生活であり、野蛮時代の売買結婚の遺風に過ぎない」というのだ。これは、「愛なき夫婦関係は、たとひ共白髪の四十年五十年の長きに亘らうとも、そして人間の拵へた制度が如何に之を認めようとも、神の最後の審判延に於て、それは明らかに一種の強姦生活であり、売淫生活である」と、奴隸的売淫生活であることをもう一度強調した後、「一夜の売淫、一度の強姦は之を罪惡として咎めながら、銀婚式金婚式に及べる長き売淫関係と強姦生活とは立派に許されてゐる。さういふ売淫や強姦は、お祝をする程までに芽出度いものであらうか」³⁴⁾と恋愛なき結婚を強く非難する。

しかし、このような悲痛な訴いかけにも関わらず、白村のいう「恋愛結婚至上主義」にはいくつもの疑問が生じる。

まず、恋愛結婚には失敗がないのか？ 結婚後にも恋愛は消滅せず、永久に持続されるものか？ さらに、現実の問題として、経済力を持たない（男性に比べ、経済力の面では遙かに劣悪な立場である）当時の女性が純粋な恋愛のみで結婚することがどこまで可能なのか？

これらについて、白村はどのような見解をみせているのかを見てみよう。

まず、恋愛持続性の問題について白村は、「結婚は恋愛の墓場だと言ふ」と発し、それは、「恋の花やかさ美しさだけが結婚後に於て消滅するといふ意味に於て、確かに半面の眞理を語ってゐる」と、恋愛持続の不可能性に就いて半分認めるような姿勢をみせるものの、次のような持論を披露する。

しかし墓場だと見えるのは、実は、死滅の墓場ではなくして、外面的であったものが内面的となり、その深さを増すと共に潜在的性質のものとなったのである。（略）もとより毎日々々朝にゆうべに二人が鼻突きあはしてゐる結婚生活に於て、最初の浪漫的恋愛時代のように、相見ること胸とどろかして居ては第一いのちが続かない。その恋愛はおのづから変じて潜在的内面的とならざるを得ないわけだ。（略）外国に居て久し振で食ふ米の飯は山海の珍味より美味いが、日本で毎日喰って居れば何とも思わない。それは決して米に飽いたのでもなければ嫌ってゐるのでもない。舌や米に対する愛着はますます深く内在的となつて居るのである。夫婦間の愛にも確かにさういふところがある³⁵⁾。

要するに、恋愛は結婚によって消滅し、葬られるのではなく、内在的により強く深くなるというのだ。さらに、恋愛結婚の永続性を保ち得るためには、男女相互間の知的判断や強い意志による、努力を不斷に続かなければならないと、恋愛の危機を乗り越える愛こそ、真なる内在的恋愛関係になり真なる自己解放、自由の生活が成立することになると、次のように解釈する。

恋愛によって結婚は一段落に達する。達してのち更に新しき時期に入り、壮年期より老境に及び、最初の花々しい浪漫的恋愛は、その光と色とを失

ふと共に深潜的となり内在的となって、いくたびか姿を変える。しかも同一の対象に関する同一の恋愛が、生涯を通じて其人の生活中心となる。(略) 炭火の比喩を用ゐれば、性慾の炭は燃えて恋愛の火となり、其火は更に白い灰となる。しかも其灰は同じ灰白色の他の粉末とは全く本質を異にして、やはりもとの炭や火と同一成分から出来てゐる物だ。日本でいう共白髪夫婦愛、西洋ならバアズンの歌にある『ジョン・アンダソン』や、カアベンタアの詩集にある『金婚式』などの恋は、黒い炭が化して白い灰になったのに比すべきであらう³⁶⁾。

黒い炭と燃えた灰が性質は異なるにせよその成分は同一であるように、恋愛と結婚もそのようなプロセスの中で永久に持続するということである。

白村が主張した「平等な人格の結合」、「男女人格の自由平等を根底とした恋愛結合であらねばならぬ」という結婚生活の永久性は、エレン・ケイの思想を受け継いだ一夫一婦制の主張でもあり、それは男女が平等に守るべきである貞操観念に拡張していく。

白村は、恋愛結婚と貞操の問題について、「至上至高の性的道徳としての恋愛は二つの人格の全的結合なるが故に、そこに一夫一婦の原則が確認せられたとすれば、必然的に之と相即不離の関係をなして生ずるものは貞操観念だ。即ち男女がお互いに貞操を確守し厳守することによってのみ、この一夫一婦が実現せられ得るからだ。貞操は恋愛の神聖なる擁護者であると共に、また眞の恋愛には必ず貞操が伴はざるべからざるものである」³⁷⁾とし、一夫一婦制の維持のためには、男女に貞操観念が必要不可欠であることを強調している。さらに『食』の問題に煩はれて居ない純粋な恋愛の場合に於ては、嫉妬は必ずしも悪徳として非難せらるべきではなく、寧ろ双方の人格の純潔を保たうとする貞操観念の副作用だとも見るべきだ³⁸⁾ということ、恋愛なき結婚への非難は、結局、近代的な一夫一婦制への支持と同時に、「文化発達」と、「生活改造」のためという社会的意義が問われているのである。しかし、それにしても、現実問題における経済力を持たない女性の結婚選択と純粋な恋愛との疑問は依然として残っている。これに対して白村はどのように答えているのか。

まず、婦人と労働の問題について白村は、「貧乏をしても構はない、『恋愛と労働』それが本当の生活だ」としたうえで、「婦人の側から言って、生涯自分を安楽に喰はせて呉れるだけの力の無い男に恋をするのは、無思慮の盲目恋愛だなどと言ふのは、極めて不純な利害打算を交ふる事によって、既に食と愛と、物質との間に分裂を生じた考へ方である。さういふ考へ方からは、本当に幸福な充実した人間生活は決して建設されない」と言っている。しかし、婦人の労働については、私は決して男女共稼ぎのことを言うのではないとして「必ずしも妻が工場に働くことでもなければ、またかの手内職と称する家庭工業の類に女が従事するを意味するものではない」といい、「女には母としての育児労働があり、家事労働がある。女が台所で食物を調理し、家内に在って掃除応対の事に従ふ労働生活は、市に出て工場で働き、車を曳く労働と同じ立派な、そして重要な社会的意義を持ってゐる」³⁹⁾と、婦人の家事を立派な労働として認めている。

それでは、何が掠奪であり売淫だと言うのだろうか。白村は次のように続く。「ただ忘れてはならない。女の家事労働が、単に生活の資（即ち食物）を得んがためにのみなされる強制労働であってはならない。自分が心身を捧げて愛する良人のために、また我が子のために、苦しければ苦しいほどそれを喜びながら、自ら進み自ら勇んで従事する労働であらねばならぬ。（略）恋愛のために労働するとき、そこにはじめて眞の自由があり創造の生活がある。」⁴⁰⁾というのだ。さらに、恋愛は「平等な二人の人格の結合であり、炸裂せる二つの魂の抱擁である」がために、「男子の方から言っても亦自分が終日額に汗して得た『食』を最愛の妻に捧げることは、雇主が賃銀奴隷に向かつて支払う労働の報酬ではない。（略）恰も敬虔な修道の僧が、信じ愛する神の前に捧ぐる供物と同じ浄さ、同じ貴さを持ってゐる。夫婦生活、家庭生活は、かくして恋愛を至高至大の基礎とすることによって、はじめて経済関係を正しく解決し、雇用関係、権利義務の関係から超越し得るのだ」⁴¹⁾と結婚にまつわる経済の問題もやはり「恋愛至上主義」を以て解決できると、言いきるようにみるが、その後、白村はこの問題について、次のような見解をも残している。

婦人のために最も望ましく願はしい事がある。それは女の経済上の独立だ。即ち今の婦人の生活に於て、『愛』と『食』との間に絶対に衝突の恐なからしむるため、換言すれば『愛』の生活が如何なる場合に於ても脅威を受くることなからしむるために、経済上の独立は願はしく望ましき事となるのだ。そうだ、願はしく望ましきと私は言ふ、必ずしも必須要件なりとは言はないが。女の経済的独立は、その人格擁護の武器であるが故に、また恋愛擁護の武器でもあるのだ⁴²⁾。

必ずしもではないが、出来れば、女も経済的に独立した方がいい、というこの白村の主張は、人格と人格の結合である恋愛結婚がいくら素晴らしく、近代的理想であっても、結婚と経済上の問題はそう簡単には解決できないという現実的な懸念であろう。したがって、「人格擁護」と「恋愛擁護」の武器として女性に経済的自立を勧めているのである。これは、単なる現実離れした男性知識人の理想主義ではなく、真の恋愛だけに道徳を求め、その中で一夫一婦制という生活革新を夢見た現実主義の一面ではないだろうか。このような白村の恋愛結婚論は、菅野聡美が指摘したように「情死や不幸な結婚生活、低い女性の地位といった問題解決のために提唱され、これですべてが解決するわけではないが改革の第一歩」⁴³⁾として評価されるべきではないだろうか。

当時のすべての抑圧を否定し、真の恋愛のデモクラシーを企画した大正時代の改革者であった白村は、「恋愛の自由」を訴えながら、その恋愛を通して、民族、人種、国家、そして男女差別までものりこえた、成熟した人格の個人と社会を夢見たのである。しかし、自分の恋愛論のゆくえを知ることもなく、関東大震災（大正 12 年）の時、津波により死亡することになる。

むすびにかえて

先述したように、本稿の目的は、明治期、文明開化の一環として輸入された恋愛が、大正期という時代性の中でどう誕生し、論じられていたのか、そして、それらが持つ意義と実態というものを、厨川白村の『近代の恋愛観』のテキストを中心に、考察していくことにあった。

それは、近代文明と恋愛思想が日本の近代において、いかに解釈できるのかという研究の一環としての検討でもあった。

ここで見えてきたのは、まず、明治期、西洋の文明として入ってきた「恋愛」が北村透谷により、人生の秘密を解く鍵として発見されたものの、恋愛と結婚という現実の矛盾に陥ったこと。その後、大正ベストセラーとして誕生した厨川白村の『近代の恋愛観』で提唱された「霊肉一致」による「恋愛至上主義」が、いかなるブームと賛否両論を巻き起こしたのか。そして、そのような非常な反響ぶりをみせた白村の恋愛論は、近代においていかなる意義を持つのか、などを論じた。その白村の主張する恋愛論は、恋愛する自由を通して、個人から社会、人類から国家までをも解放し、「生活革新」を夢見た社会改造論であったと指摘できる。

したがって、愛を通して、恋愛結婚の道徳を設定し、そこに近代的家制度につながるような一夫一婦制を主張した白村の「恋愛論」は、単なる「恋愛至上主義」の理想者として、一過性のブームとして見過ごしてはいけないという結論に至るのである。

さらに、その後、同じように到来したエロ・グロ・ナンセンスの時代や、恋愛論が主張した一夫一婦制さえも国家イデオロギーに編入されてしまった総力戦体制時代まで、近代という時代の中で、恋愛が持つ意義と恋愛が歩んだアイロニー道などを、近代という巨視的なテーマの中で、どう解釈できるのか、それは、今後の課題として研究していきたいと思う。

最後に本稿を、その「恋愛至上主義」の非難に応えた厨川白村の反論でまとめたいと思う。白村は、「わたしくしの恋愛論を評して『も少し理性に富んだ議論でなければならない』」という批判に対し次のように反論するのである。

生きる事それ自らが人銘々の芸術である。そして恋愛は人間が全我的に全人格的に、最も力強く最も美しく生きる事である。恋愛に於て霊は白光に輝き、心は白熱に燃える。それは生命の光であり、生命の熱である。その光と熱との前には区々たる表面的利害の如き理論の如き、太陽に射られた

薄氷の一片に過ぎないであらう⁴⁴⁾。

注)

- 1) 柳父章『翻訳語成立事情』(岩波新書、1982年) p.95。
- 2) 菅野聡美『消費される恋愛論 大正知識人と性』(青弓社、2001年) pp.14-15。
- 3) 井上輝子「恋愛観と結婚観の系譜」『セクシュアリティ』(岩波書店、2009年) pp.76-77 参照。井上輝子は、「大正政変と憲政擁護運動を契機として、明治末年の「時代閉塞の現状」の雰囲気は一挙に霧散し、大正デモクラシーの時代が開幕した。また、第一次世界大戦にともなう急速な産業化は、都市化の進行をもたらし、初期的な大衆社会状況が到来する」ということで「就職ないし就学のために、故郷の家を離れて、都会に出る人口が増加するにつれて、従来の大家族とは異なる、夫と妻と子供のみによって構成される核家族の量的拡大が「家」の制度を崩し、「デモクラシーの風潮にともなう解放感とあいまって、一時影をひそめていた恋愛や恋愛結婚への欲求が、一挙に噴出することになる」と論じている。
- 4) 本名は、厨川辰夫、はじめに血城、のち泊村、ついで白村と号した。1880年(明治13年)11月19日、京都で生まれた白村は、京都府立第一中学校を経て、第三高等学校大学予科第一部を卒業後、東京帝国大学文科大学英吉利文学科に入り(1901年9月)、小泉八雲、夏目漱石、上田柳村について英文学を専攻した。卒業後大学院に入り、夏目漱石の指導のもとに「詩文に現われたる恋愛の研究」を始めたが、家庭の事情により、大学院に留まることはできなかった。その後、熊本の第五高等学校教授を経て、京都の第三高等学校教授となり、著書としての第一作『近代文学十講』を刊行した。1913年(大正2年)、白村が33歳のとき、京都帝国大学教授上田敏の推挙により、同大学文科大学講師を嘱任せられ、ヴィクトリア朝並びに世紀末の英文学を講じた。その後、執筆にも専念し、『文芸思潮論』(大正3年4月)や『近代の恋愛観』(大正11年3月)などを世にだし、これらにより白村は欧米近代文学を体系的に紹介して学界文芸界に影響を

与えるとともに、文芸思潮を背景とした文明批評家として実社会を啓蒙するところもまた大きかったと評価されている。1923年7月、軽井沢夏期大学に出講し、8月鎌倉の竣工したばかりの別荘「白日村舎」に入った白村は、9月1日、関東大震災に遭遇、津波にさらわれ、2日の午後2時永眠、享年43歳だった。(昭和女子大学近代文学研究室「厨川白村」『近代文学研究叢書』第22巻、1964年、12月、pp.276-284)。

- 5) 同上、p.306。
- 6) 前掲『消費される恋愛論』p.112を参照。
- 7) 李承信は、「〈恋愛〉ブームの時代—厨川白村の『近代の恋愛観』をめぐって—」(『日本文化研究』第16号、筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム、2005)なかで「これまで『近代の恋愛観』は様々な文脈で語られてきたが、つとに指摘されているのは、とりわけ大正期の恋愛ブームの火付け役であるということ、そして単行本『近代の恋愛観』が最も売れた〈恋愛論〉であるという点である。しかしながら、その記述は部分的・断片的なものがほとんどであり、白村の『近代の恋愛観』が具体的にどのような内容で、どのように論じられているのか、そしていかなる特徴をもち、それは大正期の〈恋愛〉表象のなかでいかに位置づけられるかを検討する研究はあまりなされていなかった」と指摘したうえで、その背景には、「大正期の恋愛論そのものが、大正教養主義の一部として片づけられてきたため」であるがために、「その意味で、大正期の後半に一時的な恋愛ブームとして、〈消費〉されてしまったと指摘される、大正期の〈恋愛〉をめぐると言説そのものを、新たな視点から再検討する必要がある」と、問題提起している。
- 8) 前掲『消費される恋愛論』p.218。
- 9) 北村透谷「厭世詩家と女性」(『北村透谷選集』所収、岩波書店、1970年)p.81。
- 10) 前掲『消費される恋愛論』p.56。
- 11) 「福沢諭吉と北村透谷—思想上の二大恩人」(『明治文学研究』明治9年(1934年))。この文章はまた、後に『文学界』に集まる島崎藤村などの詩

人たちにも激しい影響を与え、文学史上、明治ロマン主義の一時期を画する重要な論文として知られている。(前掲『翻訳語成立事情』p.103より再引用)

- 12) 前掲「厭世詩家と女性」pp.89-90。
- 13) 井上輝子「恋愛観と結婚観の系譜」『セクシュアリティ』(岩波書店、2009年) p.70。
- 14) 永瀨朋枝の(『北村透谷「文学」・恋愛・キリスト教』和泉書院、2002年、p.11)によれば、「北村透谷の評論活動の本格的な出発といえる恋愛論「厭世詩家と女性」について大方の論者の指摘するのは、美那子との恋愛、結婚の体験の裏づけ」であり、その「厭世詩家と女性」と美那子との関わりは、次のように論じられてきた」という。「「恋愛は人生の秘鑰なり」に続く“恋愛賛美”と「婚姻後女性が「醜穢なる俗界の通弁」となって厭世詩家が失望するという“恋愛葬送”は、「二人の結婚生活の裏面の暴露である」ということである。
- 15) 鈴木貞美「解説『恋愛観の変遷 I』」(『近代日本のセクシュアリティ 13』ゆまに書房、2007年)。
- 16) 구리야가와 하쿠손 지음/이승신 옮김『근대 일본의 연애관』(도서출판문, 2001년) p.243. 李承信訳『近代の恋愛観』(日本学叢書 12、図書出版ムン、2010年)。
- 17) 이승신「구리야가와하쿠손(厨川白村), ‘근대의 연애관’ 수용」『일본학보』69, 한국일본학회 2006. pp.374-375。(李承信「厨川白村『近代の恋愛観』の受容」『日本学報』69、2006年)。
- 18) 로버트・브라우닝(Robert Browning, 1812-1889)의『廢墟의 恋 Love among the Ruins』의 詩文에서 抜粹した 言葉で、實際に、『近代の恋愛観』はこの詩文の一部の翻訳分からその一章は始まる。
- 19) 厨川白村「近代の恋愛観」『厨川白村全集第五卷』(改造社、1929年) p.10。
- 20) 同上、p.11。
- 21) 百連事件は、女歌人として名高い柳原白蓮が、夫である九州一の炭坑王・

伊藤伝右衛門に、絶縁状を送りづけるという大正時代の大スキャンダル。

- 22) 前掲「近代の恋愛観」 p.69。
- 23) 同上、p.70。
- 24) 同上、p.74。
- 25) 同上、pp.16-19。
- 26) 溝口元「『変態心理』に見る大正期の生命科学」、小田晋／栗原彬ほか編『「変態心理」と中村古峡』所収、不二出版、二〇〇一年、一〇八ページ、古川誠「恋愛と性欲の第三帝国」『現代思想』一九九三年七月号、一一〇～一二七ページ（前掲『消費される恋愛論』より再引用 p.109）
- 27) 前掲「近代の恋愛観」 p.20。
- 28) 同上、p.22。
- 29) 同上、p.23。
- 30) 同上、p.24。
- 31) 同上、p.37。
- 32) 同上、p.48。
- 33) 同上、pp.108-109。
- 34) 同上、pp.26-27。
- 35) 同上、pp.37-38。
- 36) 同上、pp.140-141。
- 37) 同上、pp.133-134
- 38) 同上、p.134。
- 39) 同上、pp.121-122。
- 40) 同上、p.122。
- 41) 同上、p.123。
- 42) 同上、p.126。
- 43) 前掲『消費される恋愛論』 p.168。
- 44) 前掲「近代の恋愛観」 p.187。